

□海外文献紹介□

良性の肛門直腸病変を持つ患者における大腸ファイバースコピー

Colonoscopy in patients with benign anorectal disease: *Longe WE, et al* (Dis Colon Rectum 36: 368-371, 1993)

良性の肛門直腸病変を持つ患者に対して、大腸新生物と炎症性腸疾患の発生率を調べるために、prospective study が行われた。痔核、裂肛、痔瘻、肛門膿瘍、肛門のコンジローマに罹患し、3 年間以上経過観察された 102 人について検討された。対象は、消化器症状やその他の全身症状を伴わず、検査には大腸ファイ

バースコープが使用され、全例回盲部まで調べられた。全患者の平均年齢は 53.5 歳、男女比は 1.6:1 であった。

炎症性腸疾患は 1 例もみられず、102 人中 10 人 (9.8%) に新生物 (9 人が腺腫で、1 人が腺癌) が見つかった。新生物の発見された患者は、高齢の傾向があり、50 歳以上では有意であった。新生物は、家族歴がある患者のうち 19% に、家族歴がない患者では 7.4% に見つかったが、家族歴の有無に有意差はなかった。下血を呈した患者に、新生物が多くみられることはなく、肛門直腸の特定の病変があることで、大腸新生物

のリスクは増加しなかった。良性の肛門直腸病変を持つ患者と健常者とは、大腸新生物に罹患するリスクに有意差はなかった。

著者らの検討によれば、良性の肛門直腸病変と大腸新生物は共存するので、肛門直腸病変で新生物の予測をすることはできない。したがって、著者らは、大腸ファイバースコープを施行するか否かは、年齢、大腸癌の家族歴、消化器症状、その他のファクターによって決められるべきであると述べている。

(愛知県がんセンター消化器内科
澤木 明 抄)